



街歩きを楽しむ地元の人

日本とスペインの交流会議で11月後半、スペインのバレンシアを訪れた。この会議は毎年、日本とスペインで交互に開かれるものである。3年前に静岡市で同会議が開かれて以来、スペインのマラガ、山口、そして今回のバレンシアと続けて会議に参加する機会を持つことができた。

日本とスペインという遠い国のようでもあるが、江戸時代の初期から交流があった。静岡市の久能山東照宮には、当時のスペイン国王が徳川家康公に贈った時計が保存されており、3年前の会議でもその時計のことで盛り上がり

伊藤 元重 学習院大教授(国際経済学)

た。当時、この欄でもこの会議のことを取り上げたので、覚えていらっしゃる方もいるだろう。

さて、バレンシア市は私にとっ て初めての土地だった。地中海に面した温厚な気候の街で、スペインではマドリッド、バルセロナに ついで、人口第3位の街である。人口は78万6千人という。静岡市

バレンシアのにぎわい

や浜松市と同じような人口規模である。ところが、街を歩いてみると、中心地区は多くの人でにぎわっている。静岡や浜松とは比較にならないようなにぎわいである。

多くの人はスペイン語あるいは地元のカステイリヤ語で話しているようで、海外から多くの

観光客が来ているとも思えない。11月後半という時期は、スペインの国内で多くの観光客が移動する時期でもない。街をにぎわせているのは、大半は地元の人である。

多くの人が、ゆつくりと散歩を楽しんでいる。カフェが多くあるが、そこでは一杯のコーヒーやワ

中心部に商業と住居混在

中心地区であるので、当然、1階部分には小売店や飲食店が多く入っている。しかし、どの主要通りを見ても、7階建て程度の建物が道路沿いにびっしりと建っている、2階以上の多くの部分は住宅として利用されているのだ。建物の大半は100年以上の古いものである。当時の住民の主たる移動手段は徒歩であった。徒歩で生活

できる範囲に多くの人が住んだというところで、中層のビルが並んだというところだろう。それが今でもそのまま残っている。

都市の中心部に多くの人が住むというところは、人口100万人以下の中堅都市にとっては、街のにぎわいを引き出すのに大きな意味を持っている。徒歩圏に多くの人が住むからこそ、にぎわいのある街ができる。にぎわいがあるものは、それだけで魅力的であるものだ。

日本でも、街の中心部に住宅を集めていく必要がある。高層のタワーマンションである必要はない。5階建て程度の低層の住宅であっても、その1階部分を商業に使うことで、商業と住居が混在したにぎわいのある街ができるはずだ。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。